

湛甘泉の「詩」について

志賀 一朗

詩形	詩	続詩	計
四言古詩	九	一	一〇
五言古詩	五六	五七	一一三
六言古詩	一三	七	二〇
七言古詩	五	九	一四
五言絶句	三八	二〇	五八
七言絶句	四七	九一	一三八
五言律詩	一八	〇	二四
七言律詩	一	二	三
七言排律	二	〇	二
頌	一〇	〇	一〇
歌	〇	〇	〇
賦	〇	〇	〇
歌行	〇	八	八
辭類	四	〇	四
合計	二〇七	二〇三	四一〇

明の大儒湛甘泉（一四六六—一五六〇）の詩は、『甘泉文集』三十二卷中、卷二十六「詩」、卷二十七「続詩」に収められているが、配列が雑然としていたので、詩の形態から、両卷を一轄して、上のように整序した。詩の総数は四百十首で、必ずしも多くはないが、湛甘泉の学問・思想・人物等を、よく表わしている。

上の表に依ると、七言絶句の百三十八首が一番多く、次は五言古詩の百十三首である。第三位が五言絶句の五十八首で、以上の三詩形で三百九首となり、総数の約四分の三を占めている。したがって湛甘泉は、この三詩形に重点を置いて作詩したことが理解される。詩形の中に、四言古語・六言古詩・七言古詩のあるのは、『詩経』や『楚辞』『文選』等

の体裁に倣ったのであろう。排律は七言で一首あるだけである。歌十首、歌行八首、辞類七首があるが、これは注目すべきことである。次に、各詩形から数詩を選び校注し、湛甘泉の詩の傾向を見てみよう。

一 四言古詩

1 翩翩者棣三章、贈^①潘希召之弟^②。辰陽^③。

ア 翩翩者棣 翩翩^{へんぺん}たるは棣^③。

花萼相及 花萼相及^③ぶも

夫我不見 夫^それ我^わ見え^ず

兄弟異邑 兄弟^③邑を異にす

兄弟異邑 兄弟^③邑を異にす

相送于南 南に相送る

涕淚以泣 涕淚^③以て泣く

イ 翩翩者棣

翩翩たるは棣

花萼相成

花萼相成るも

夫我不如

夫れ我如かず

兄弟異京

兄弟京を異にす

兄弟異京

兄弟京を異にす

相送于野

野に相送る

涕淚沾纓

涕淚纓を沾す

ウ 翩翩者棣

翩翩たるは棣

花萼相成

花萼相成るも

永以為恆

永く以て恆と為さん

言撫其根

言に其の根を撫で

言采其花

言に其の花を采るも

道遠莫致

道遠くして致す莫し

擲之長嗟

之れを擲つて長嗟す

注 ①潘希召—湛甘泉の弟子。②辰陽—湖南

省辰溪県の西。③棣—にわさくら。桜桃に

似た果樹。④嘩嘩—かがやくさま。盛んな

なみだ。

2 習古齋

習之習之 之れに習い之れに習う

古自我作 古は我より作す

習乎自然 自然に習う

学而不学 学んで学ばず

化功在手 ①化功手に在れば

天機可握 ②天機握る可べし

誤筆成蠅 筆を誤りて蠅と成らば

運斤去聖 ③斤を運びて聖を去らん

注 ①化功—変化のわざ。②天機—造化の機密。③聖—しつこい。

3 ① 平南遣興

漁淵水深 漁淵水深く

采芝雲迷 采芝雲迷ふ

寄懷雲水 懷を雲水に寄せ

抗志高樓 志を高樓に抗ぐ

嚴霜隕木 嚴霜木に隕ち

歸鴻背飛 歸鴻背に飛ぶ

天寒日短 天寒くして日短く

途長行遲 途長くして行遅し

歲暮暮矣 歲暮を云う

4 ① 敬止

風雲自天 風雲天よりし

龍蛇起隆 龍蛇起隆するも

君子敬止 君は敬止

淵淵穆穆 淵淵穆穆たり

注 ①敬止—つつしんで止まるべき所に止まる。『詩經』大雅、文王に「穆穆文王、於緝熙敬止。」とある。

5 ① 睨院二章、章六句。

睨院念三友生二也。興起黃鳥有懷、

音問遂及レ德、言三終思三盍簪一

睨院黃鳥 睨院たる黃鳥

遺音千山 音を千山に遺す

懷我良朋

懷が良朋を懷う

声聞其先

声聞其れ先んず

我之思矣

我之れを思う

矧茲德音

矧んや茲の德音をや

イ

黃鳥睨睨

黃鳥の睨睨たる

響伝千岑

響千岑に伝う

懷我好友

我が好友を懷う

弗思德音

德音を思わず

我之憂矣

我之れを憂う

矧彼盍簪

矧んや彼の盍簪をや

注 ①睨睨—うるわしいさま。また声が清和

円転なさま。『詩經』国風、邶の凱風に、

「睨睨黃鳥、載好其音。」とある。②盍簪—

友だちのより集まること。朋友の会合。

6 圯橋進履

進履之心

履を進むるの心

可以授道

以て道を授く可し

惜哉師伝

惜いかな師伝

未聞何奥

未だ何の奥なるを聞かず

注 ①圯橋—橋名。江蘇省内。張良がここで

7

希夷睡一図

黃石公から太公望の兵法を授った。

不醒是夢

醒めざるは是れ夢

醒亦是夢

醒むるも亦た是れ夢

既同是夢

既に同じく是れ夢なるも

長年何用

長年何の用かあらん

注 ①夷睡—たいらに眠むる。ぐっすり眠むる。

8

示諸學者一

心無一物

心一物無ければ

天理見前

①天理前に見る

何為天理

何をか天理と為す

本体自然

本体は自然なり

廓乎渾今

②廓乎として渾なれども

四時行焉

③四時行わる

勿忘勿助

忘るる勿れ助くる勿れ

聖則同天

聖なれば則ち天に同じ

注 ①天理—宇宙の理法。宇宙は無為自然で

それでいて寸分も違わず、条理正しく運行し、万物を生々している姿。②廓乎—広々として大きいさま。

9

昔我三章、章六句。

昔我感三昔也。中貞不尤。帰三之

斯道之命焉。

ア

昔我視爾

昔我爾を視る

兄弟不猶

兄弟猶じからず

今爾既立

今 爾既に立つ

視我如響

我を觀ること響の如し

雖則如響

則ると雖も響の如し

我心不尤

我が心尤めず

イ

事我之心

我に事うるの心

転而他人

転じて他人なり

凡今之人

凡そ今の人

薄如秋雲

薄きこと秋雲の如し

雖如秋雲

秋雲の如しと雖も

我心貞珉

①我心貞珉なり

ウ

既操我戈

既に我が戈を操り

今入我室

今 我が室に入る

匪則入室

則るに匪ずして室に入る

道命不一

命を道う一ならず

其一不一

其れ一も一ならざるも

我心中実　我が心中実す
注　貞珉—固い石。

(続)
⑩ 即席送^①陳梓卿^②歸省、携^③姪来^④山。

太丘子弟　太丘の子弟

從宝潭来　宝潭より来る

来時一念　来る時の一念

自天先開　天より先ず開く

河源滄滄　河源滄滄として

到海不回　海に到りて回らず

注　①陳梓卿—湛甘泉の弟子。②太丘—県名。

河南省水域の西北。後漢に置く。③宝潭

—不詳。④滄滄—涓の俗字。細く流れるさ

ま、ちよろちよろ。

四言古詩は総て十首。その中「統詩」は一首である。この十首を内容上から分類すると、心境三(2・3・7)、送別二(1・10)、学説二(4・8)、友情一(5)、伝授一(6)、心一(9)となる。花鳥風月のいわゆる自然を詠んだ詩は一首もない。

二 五言古詩

五言古詩は、卷二十六「詩」に四十四題・五十首、卷二十七「統詩」に五十三題・五十首、計九十七題・百十三首で、七言絶句百三十八首に次いで多い。次にそれらの詩の題名を挙げ分類し、湛甘泉の詩の傾向を見よう。

番号	題　　目	分類	備　考
1	九章贈、別并序。	送別	王陽明
2	別後与 ^① 趙元默言懷四首。	感懷	趙　元
3	戊辰臘廿七日夜、夢 ^② 王伯安兄。	友情	王伯安
4	贈 ^③ 寇子之南都三首。有序。	送別	寇子惇
5	秋懷三首。寄 ^④ 王廬陵陽明子。	友情	王陽明
6	冥鵬。	感懷	莊　子
7	舟泊 ^⑤ 梁家庄環括、与 ^⑥ 苾原忠 ^⑦ 語。	学説	勿忘勿助
8	謁 ^⑧ 徐高士墓二章。章十句。	謁墓	徐高士
9	明月吟三章。 ^⑨ 南安舟中。	自然	南安舟中
10	曲江吟。 ^⑩ 長文獻。	自然	錢塘江

27	謁 ^① 石翁墓二首。贈 ^② 人遊 ^③ 南雍。	謁墓	陳白沙
26	孝思詩。	孝行	王陽明
25	北都自嚴、寄 ^④ 陽明子。三婦辭。	友情	陽明
24	画。	画庭	陳睡鄉
23	付 ^⑤ 渡北行、夜阻 ^⑥ 風山。旗 ^⑦ 坑、寄 ^⑧ 懷陳睡鄉。馬懷瑞 ^⑨ 諸。同 ^⑩ 譏。	感懷	馬懷瑞
22	示 ^⑪ 諸生、兼告 ^⑫ 同志。	示教	諸生
21	酬 ^⑬ 方吏部石泉与 ^⑭ 烟霞同 ^⑮ (洞之誤)板築。	酬詩	方猷夫
20	題 ^⑯ 直菴。	学説	敬　士
19	送 ^⑰ 楊士德還 ^⑱ 潮。	送別	楊士德
18	贈 ^⑲ 四川王公子敬之。与 ^⑳ 韶子 ^㉑ 有序。	学説	敬　子
17	題 ^㉒ 画二首。	感懷	韶　子
16	贈 ^㉓ 唐京兆得 ^㉔ 命、送 ^㉕ 母還 ^㉖ 鄉。名鳳儀。	送別	唐京兆
15	題 ^㉗ 東湖書院。為 ^㉘ 吳獻臣中丞也。不就 ^㉙ 大司空之擢。飄然辭歸。	学説	自然
14	子友方子思 ^㉚ 道、棄 ^㉛ 湖廣憲僉 ^㉜ 、逃 ^㉝ 歸 ^㉞ 三衢山、築 ^㉟ 室以居、号 ^㊱ 通吏窩。寄 ^㊲ 題數語。	自然	天理

28	為黃理夫壽親。	師情黃理夫
29	題心漁為錢洪甫乃尊。	錢洪甫
30	題鄒山人江湖詩訪因以贈之。	學說天機
31	治官舍後、小圃種蔬大吟。	家庭
32	送巡按虞侍御還朝。	送別虞侍御
33	福山素心亭詩。有序。	學說自然
34	題春菴。	感懷
35	贈謝生顯婦祁門。	學說勿忘勿助
36	題李仲謙昆仲、程門立雪圖。	感懷李仲謙
37	婺源五嶺詩。	
38	宿斗山書院詩。有序。	
39	宿和州香泉書院題壁、兼寄三州守魯君承恩。	魯君承恩
40	登嶧山感懷。	登嶧山
41	題黃中丞公求放心軒。	
42	送莊西峯還江浦。	送別莊西峯
43	送符生士亨還南昌三章。	符生士亨
44	贈九山陽子還古岡。	九山陽

45	始居朱明洞館、示洗奕清秋官、劉応言式尹諸子。	示教洗少汾
46	題席光亭。有序。	感懷陳白沙
47	有懷南岳約作詩、酬覺山侍御。	洪峻之
48	衡山不遠。	遊山水
49	將之南岳、登岸渡武溪、過芙蓉、寄覺山。	洪峻之
50	至梯上山麓、將登矣。忽為大雨所阻、及之僕夫而還、作詩、訟梯上神。	
51	南岳訪胡致堂、五峯兄弟故居。	胡致堂
52	送方金剛生還福山詩。	送別胡五峯
53	四居吟。有序。	家庭金濫浜
54	飲洗少汾氏鶴園、觀烟火、有感、似同志。	感懷洗少汾
55	初宿仰聖樓。	
56	將入朱明、宿源頭精舍。	
57	自挽詩。丙午七月十一夜、在樵。痰火大、作幾絕。時燈下拋案述此。	挽詩

58	鷄鳴一章。示諸生。	示教
59	自壽、且酬三十子壽觴。	家庭
60	與鄭孔新。	感懷鄭孔新
61	與秦幼貞。	秦幼貞
62	三日一梳頭。	家庭
63	與疾如羅浮赴約。	感懷
64	喜報洪覺山、方時素、將至樵。	師情洪峻之
65	同洪覺山、方時素與曾廓齋、為羅浮之遊、遂餞別江門釣台。因以為贈。	送別洪峻之
66	同方時素、洪覺山、曾廓齋、何海齋、李中岡、馮左山、鄭孔新、鄧粵良、羅浮行、望見雲陰、停駐不散。久之、即天傘精舍也。	感懷方時素
67	贈洪覺山、方時素、洪峻之。	師情洪峻之
68	遊小華山。	遊山水
69	同道林諸賢、天闕泛舟。	天闕

83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70
聞陳黎梁六君、羅浮舟中、為海盜所驚、而歸作詩嘲之、且定	刻石。	千忍亭詩書付孫潤先	遊山泛湖、不主下呈知已。	移居江岡新樓、期非	知尽處答之。	日者多言八字生生未	送秋官盧君星野之京詩。有序。	漫興。	寄題陳朗溪詩。有序。	送廣州武守吳白灣赴部。有序。	送惠州守金君濫派入覲詩。	將至弘山、念三賢。	西樵與蔣道林諸遊者。新創天階精舍作。
黎梁六	感懷	感懷	心境	感懷	感懷	感懷	感懷	感懷	感懷	感懷	感懷	感懷	感懷
黎梁六	孫潤先	孫潤先	孫潤先	孫潤先	孫潤先	孫潤先	孫潤先	孫潤先	孫潤先	孫潤先	孫潤先	孫潤先	孫潤先

97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84
韻、奉答、因招隱。	次市石子呂學士南岳	孫。	答顏山農。名鈞	丁巳正月十二日、抱玄	紀夢詩。有序。	懷古三嘆。	者。	偶正禪語之謬、送行	之愜。	都、不覺發江湖廊廟	送黑翠峯參戎、赴留	過金淹腰淹吟。	答謝贛州汪周潭督府。四首。
招隱	招隱	招隱	感懷	感懷	感懷	感懷	感懷	感懷	感懷	感懷	感懷	感懷	感懷
呂懷	呂懷	呂懷	岳武穆	岳武穆	岳武穆	岳武穆	岳武穆	岳武穆	岳武穆	岳武穆	岳武穆	岳武穆	岳武穆

右表の詩題を見ると、「自然」そのものを詠んだのは、9「明月吟」と10「曲江吟」の二題だけで、これ以外は、総て人事や事物を詠んだ詩といふことができる。

それを表のように分類したのは、内容上鮮明なものは、それにふあわしい名題をつけ、単に感じ思ふことを詠んだ詩は、皆「感懷」とした。したがって「感懷」は一番多く、三十三題ある。まず「自然」の詩から挙げよう。

(1) 自然

9 明月吟三章

南安舟中

ア 挙首望明月 首を挙げて 明月を望めば
明月沈海中 海中に沈まんとす
挙手招白雲 手を挙げて 白雲を招けども

白雲遊太空 白雲は 太空に遊ぶ
白雲不可結 白雲は 結ぶ可からず
明月不可縫 明月は 縫う可からず
攬袂長嘆息 袂を攬りて 長く嘆息す
星火忽已結 星火 忽ち已に終る
安得飛仙子 安んぞ飛仙子たるを得ん

借我一蒼竜

我に借せ 一蒼竜^①

イ

明月出海東
照入我懷中

明月 海東に出で
照して 我が懷中に入る

兩手捧懷笑

兩手を捧げて 笑を懷く

浮雲生我胸

浮雲 我が胸に生ず

移枕見遠山

枕を移して 遠山を見んと

開牕得清風

牕^{まど}を開けば 清風を得

適意非有期

適意 期あるに非ざるも

至道末有從

至道 従うあること末し

蓬萊隔弱水

蓬萊^② 弱水^③を隔つるも

無力竜能杭

無力 誰か能く杭^{わた}らん

ウ

仰看明月殿
燦燦姮娥居

仰いで 明月の殿を看れば
燦燦たる 姮娥^④の居

我欲跳身入

我 身を跳らして入らんと

欲すれば

飛雲騎蟾蜍

飛雲 蟾蜍^⑤に騎^{のり}る

婦來啓靈府

婦來して 靈府を啓けば

中有明月珠

中に 明月の珠あり

珮之当明月

之れを珮^あびて 明月に当た

れば

円光満入区

円光 満ちて区^⑦に入る

願掃浮雲翳

願わくは 浮雲の翳^{かげ}を掃い

本来無外須

本来 外に須^すつことを無か

らん

注 ①蒼竜—東方七宿の星の名、すなわち角・亢・氐・房・心・尾・箕の星。②蓬萊—神仙

の住むという海島。③弱水—川の名。仙境に

ある川。④姮娥—月の異名、羿(ゲイ)の妻

の名。不死の薬を西王母(仙人の名)に請っ

て、不死の薬を盗み、服用して仙人となり、

月中に奔り、月の精となったという故事。⑤

蟾蜍—ひきがえる。⑥靈府—神聖の符瑞。神

符、おふだ。⑦区—すまい。

10

曲江吟 長文獻

曲江江水長

曲江^①は 江水長く

欲濟川無梁

濟^{はし}らんと欲するも 川梁な

し

美人不可即

美人 即くべからず

風度安可量

風度 安んぞ量るべけん

飛鳥拱高枝

飛鳥は 高枝を拱び

鳴鳳在朝陽

鳴鳳^②は 朝陽に在り

黃堂世已遠

黃堂^③ 世に已に遠く

千載空翱翔 千載 空しく 翱翔^④す

注 ①曲江—浙江すなわち錢塘江。②黃堂—太

守の異称。③翱翔—翼を上下して飛ぶさま。

この二の詩を見るに、始めに景を叙し、終わりに情を述べている。いわゆる漢詩の形体をなしている。甘泉の心情がよく表わされて、読者にはのぼのとした感懷を与える。平易な表現の中に、深奥な甘泉の哲理が宿されている。

(2) 友情

友情の詩は、故人王陽明に寄せた三題がある。王陽明(一四七二—一五二八)は湛甘泉より六歳年少で、三十四歳の時、初めて北京で湛甘泉と邂逅した。時に甘泉は四十歳であった。この邂逅はまさに世紀的なもので、「二見して定交し、共に聖学を倡明するを以て事とす。」「(『王文成公全書』「年譜」)とい、また互いに、「未だ此の人を見ず。」「(陽明先生墓誌銘)とい、一見して終生の交りを結んだ。爾來、王陽明が五十七歳で没す

るまで、二人の親交は変わらず、王陽明の没するや、湛甘泉は「陽明先生墓誌銘」を書き、衷情を切々と吐露した。洵にこの厚い友情には、滂沱たる涙の流れるを覚える。

(詳細は拙著『湛甘泉の研究』(風間書房)を参照されたい。)

14 北都自蔽、寄陽明子

玉台有名果 玉台に 名果有り
成之三千春 之れを成す 三千春
当其未成時 其の未だ成らざる時に当たりては

凡品不足珍 凡品にて 珍ずるに足らず
持以贈世人 持して以て 世人に贈るも
洩口反見噴 洩口 反つて噴らる
白壁按劍起 白壁に 劍を按じて起つも
青蠅止棘頻 青蠅は 棘に止ること頻なり

聖人誠囊括 聖人は 誠に囊括し
明哲貴保身 明哲は 保身を貴ぶ
雲竜会有時 雲竜も 会するに時有り
応感豈無因 応感 豈に因る無からんや

不惜知音寡 知音の寡きを惜まず
所惜不能琴 惜む所は 琴する能はざるを

注

①囊括―袋に入れて口をくくる。②雲竜―天子或いは王侯英雄。こゝは陽明を指す。③知音―琴の音を知る。転じて己の心を知る親しい友人。伯牙の弾く琴を鍾子期がよく理解した故事。『列子』に「伯牙鼓琴。志在高山。鍾子期曰、峩峩兮若泰山、志在流水。子期曰、洋洋兮如江河。伯牙所念、子期必得之。子期死。伯牙絶絃。以無知音者。」(湯問)

3 ① 戊辰臘廿七日夜、夢王伯安兄。

四時有去來 四時 去來有るも
逐客久不至 客を逐うて 久しく至らず
天運尚可量 天運は 尚お量る可きも
人事誰能計 人事は 誰か計るを能くせん

昨夜夢見之 昨夜 夢に之れを見
彷彿精神契 彷彿として 精神契す
語久声弥低 語ること久きも 声弥よいよ低く

画地示予字 地に画いて 予に字を示す
滅没不可弁 滅没して 弁す可からざるも

②

了了得其意 了了として 其の意を得
言別何匆匆 別れを言うこと 何ぞ匆匆たる

路遠会難繼 路遠くして 会い難きこと

③

合歡誰知夢 合歡 誰ぞ夢なるを知らん
是夢聊足慰 是れ夢なるも 聊か慰むるに足る

借如平生魂 借い 平生の魂の如くなる

④

亢爽不可致 亢爽は 致す可からず
念之生悲懷 之を念えば 悲懷を生じ
達旦不能寐 旦に達するも 寐ぬること能わず

注 ①辰臘―武宗の正徳三年(一五〇八)十二月。陽明三十七歳。この年の春、竜場に着了。

た。②伯安―王陽明の字。③精神契―甘泉は陽明だと心に決めた。④了了―あきらかなさま。⑤亢爽―たかくさっぱりしているさま。⑥悲懷―悲しみにいたむ。

5 秋懷三首。寄王廬陵陽明子^①。

ア 秋月欠復円 秋月 欠け復た円かななるも

客行久不還 客行きて 久しく還らず

不還歳亦暮 還らずして 歳亦た暮る

念子屢長歎 子を念えば 屢ばしば長歎

歎罷繼以歌 歎ずるを罷め 繼ぐに歌を

以てするも

歌竟淚如泉 歌竟れば 涙泉の如し

何時得会晤 何れの時か 会晤するを得

ば

所懷万一宣 懷う所 万に一宣せん

イ 涉園採桃李 園を涉り 桃李を採り

持以贈所知 持して以て 知る所に贈る

非貴桃李顔 桃李の顔を貴ぶに非ず

不言自成蹊 言わずして 自ら蹊を成せ

ばなり

豈無蘭桂好 豈に蘭桂の好き無きも

質以香自虧 質は以て香り 自ら虧けん

や

默默牛鑿子^③ 默默たる 牛鑿子なるも

ウ 封書寄燕鴈 封書を封じて 燕鴈に寄すも

鴈不過衡陽 鴈は 衡陽を過ぎず

封書寄江魚 封書を封じて 江魚に寄すも

魚沈江水長 魚は沈み 江水長し

江水亦有竭 江水も 亦た竭くること有るも

封書永不滅 封書を封ぜば 永く滅びず

耿耿無由宣 耿耿として 宣ぶるに由無く

心期浩無涯 心は浩く 涯て無きを期す

書を封じて 燕鴈に寄すも

鴈不過衡陽 鴈は 衡陽を過ぎず

封書寄江魚 封書を封じて 江魚に寄すも

魚沈江水長 魚は沈み 江水長し

江水亦有竭 江水も 亦た竭くること有るも

封書永不滅 封書を封ぜば 永く滅びず

耿耿無由宣 耿耿として 宣ぶるに由無く

心緒自中結 心緒 自ら中結す

注 ①廬陵—江西省廬陵縣(吉安)。②会晤—面

会。③牛鑿子—鑿は醫に同じ。牛鑿は牛の疲

を治す医者、牛鑿子は牛醫兒ともいい、侮蔑

するにいう。④鴈—雁に同じ。がん。⑤衡

陽—湖南省衡山縣の東北。⑥耿耿—心の安か

らぬさま。

14題「北都」は今の北京である。湛甘泉

は四十歳の弘治十八年乙丑(一五〇五)、会

試に及第し、翰林院庶吉士となり、北京に住

むことになった。この時、王陽明(三十四歳)

は吏部におり、学を講じていた。二人の初会

はこの年である。

王陽明は湛甘泉と出会った翌年、すなわち

武帝の正徳元年丙寅(一五〇六)、三十五歳

の二月、封事を武帝に奉り、かえって詔獄に

下り、竜場(貴州省貴州の西北)の駅丞に貶

謫される身となった。それは時あたかも武帝

の初政に当たり、宦官劉瑾が帝の寵愛を一身

に受け、国政を壟断していた。そこで、これ

を見かねた南京の言官戴銑、薄彦徽等が、武

帝に諫言したところ、旨意に逆え、詔獄に下

ったので、これを救おうとしたためである。

そこで陽明は、翌正徳二年丁卯(一五〇七)、

三十六歳の夏、貴州の竜場に赴いた。その時

甘泉は、惜別の情おく能わず、詩九章を作っ

て贈った。それが1「九章贈、別并序」であ

る。(全詩は拙著『湛甘泉の研究』(風間書房)

に載せてあるので参照されたい。)かくして、

正徳三年丙辰(一五〇八)、三十七歳の春、

竜場に着いた。

この詩は、陽明が竜場に着いた年の冬では

一三五

端を発し、陽明を懐う心情を咄露している。

(3) 送別

なかるうか。それは題に「北都自嚴」とあり、さらに初句に「玉台有_二名果_一」によって推定される。終わりの「不_レ惜_二知音寡_一」所_レ惜不_レ能_レ琴」と結んのいるのは、陽明と甘泉の關係を、伯牙と鍾子期に寄せ、二人が如何に親友であつたかを窺わせる。

3 題 この詩は「戊辰臘」とあることから、武帝の正徳三年（一五〇八）、甘泉四十三歳の十二月二十七日夜、王陽明を夢見て作つたもので、陽明が竜場に着いた年の暮である。甘泉の陽明を思う気持ち、よく表わされている。「念_レ之生_二悲懷_一」達_レ旦不_レ能_レ寐」は心を打つ。

5 題 「王盧陵陽明子」とあることから、正徳五年庚午（一五一〇）、王陽明三十九歳の秋ということになる。それはこの年の三月、陽明は二年間の竜場の謫居生活が赦されて、盧陵県の知県に昇進し、盧陵に着き、十二月には、南京刑部四川清吏司主事に移っているからである。（竜場の謫居生活については、拙著『王陽明と湛甘泉』（新塔社）を参照されたい。）「秋月」「桃李」「燕鴈、江魚」から

「送別」の詩は、十四題十六首ある。「感懷」の三十三題三十九首に次ぐ多数である。これらの中から、六題を挙げ解説しよう。

4 贈_①寇子之_②南都三首。有序

山西寇子惇、賦質敦厚。蓋其所_レ謂忠信如_二孔子者_一。予嘗欲_レ進_二之于廣大_一而未_レ能。於_二其之_二南都大理_一也、不_レ能以忘_二情見_一乎辭。

一 鷺或兩鷺 一鷺 或いは兩鷺
嚶嚶若求善 嚶嚶として 善を求むるがごとく
意氣正相感 意氣 正に相感ずるも
忽值時節變 忽ち 時節の変に値う
時節日已變 時節 日に已に變じ
君行日已遠 君の行くこと 日に已に遠し
一隔如參商 一たび隔つれば 參商の如く

咫尺不相見 咫尺に 相見ず
相見不尽情 相見ても 情を尽くさず
相思難嗣声 相思うも 声を嗣ぎ難し

注 ①寇子—寇子惇。湛甘泉の弟子。②南都—南京。③大理—官名。刑獄を司る官。今の司法官。④鷺—うぐいす。⑤嚶嚶—鳥の鳴く声。

⑥參商—曾子と子夏。曾子は德行。子夏は文学で知られている。⑦咫尺—八寸か一尺ばかりの意で、近い距離。

燁燁璞中玉 燁燁たる 璞中の玉は
重儷連城質 重ねて 連城の質に儷す
戒之在雕琢 戒を戒むるは 雕琢に在り

勿為人所欺 人の欺むく所と為る勿れ
君身有至宝 君の身には 至宝有り
靈瑩無瑕疵 靈瑩は 瑕疵無し
去来名工 去くゆくは 名工を来し
無為強鑿之 強いて 之れを鑿こと為す無し

敗甲与枯草 敗甲と枯草とは
尚可以吾疑 尚お以て 吾れ疑う可し

注 ①燁燁―てりかがやくさま。②璞―あらたま。まだみがかない玉。③連城の質―秦の昭王が十五城と交換しようと趙に請うた和民の璧。④雕琢―玉をささみみがく。⑤靈瑩―明らかな心。⑥敗甲―自滅。

形下下影響
形上上神奇
智愚一以遠
慎哉此毫釐
上下匪一体
何由知彰微

ウ

①形下は 影響を下だし
②形上は 神奇を上ぼす

智愚 一に以て遠し

慎めや 此れ毫釐^④

上下 一体に匪^あざれば

何に由りてか 彰微を知らん

修之在敬義 之れを修むるは 敬義に在り

り

人力非天機 人力は 天機に非ず^⑤

請勿信我語 請う 我が語を信じ

親見乃不疑 親しく見て 乃ち疑わざる

こと勿れ

注 ①形下―形而下の略で、有形のもの。②形上―形而上の略で無形のもの。③神奇―神靈

不可思議なこと。④毫釐―ほんの僅か。⑤天機―造化の機密。

21

送^①楊士德還^②潮

送子翳門関

上上官山渡

自渡還自濟

千聖同大道

下樵苦不難

子を送り 門関に翳せば

上り上って 官山を渡る

自ら渡り 還た自ら済る

千聖は 大道を同うす

樵を下るは 苦だ難からざるも

樵を上るは 苦だ早からず

有形は 豈に滞うらざらん

や

出入に 奴主を更めん^⑤

短景は 倏として流るるが如きも

永懷歲将暮 永く 歳の将に暮れなんと

するを懷う

且つ 楊朱を笑うこと莫れ

楊朱は 岐路に泣く

且莫笑楊朱

楊朱泣岐路

注 ①楊士德―湛甘泉の弟子。②潮―広東省潮州府。③官山―広東省南海県の西南。西樵山

の北。④樵―西樵山。広東省南海県にあって、甘泉が晩年子弟を教育した地。⑤奴主―下男と主人。⑥楊朱―戦国時代初期の思想家。為我説を主張。(四四〇頃?)

42

送^①三^②莊^③西^④峯^⑤還^⑥浦^⑦江^⑧

峩峩定山尊

蒼蒼出雲裏

望之不可即

盈盈隔江水

何以愛此山

愛此山中雲

泠泠不成雨

念之徒傷神

定山不可見

得見西峯子

愛子若定山

聊以慰予意

之子度江去

峩峩たる 定山尊く

蒼蒼たる 出雲の裏

之れを望むも 即く可からず

盈盈として 江水を隔つ

何以て 此の山を愛す

此の山中の雲を愛すれば

なり

泠泠たれども 雨を成さず

之れを念えば 徒らに神を傷む

定山は 見る可からざるも

西峯子を見るを得

子^しを愛すること 定山の若く

聊か以て 予の意を慰む

之子 江を度って去る

渺然一葦杭 渺然たる 一葦の杭^⑦

登高賦尋歸 高きに登りて 賦して將に

帰らんとす

于以写不忘 于に以て 写して忘れず

注 ①莊西峯—湛甘泉の弟子。②浦江—浙江省

浦江県。③峩峩—高くそびえているさま。④

定山—浙江省杭県の東南。一名獅子山。⑤盈

盈—水の満ちているさま。⑥泠泠—うるおい

の多いさま。⑦一葦の杭—一本の葦の杭(ふ

ね)。杭は航と同じ。

ウ

所差在毫釐

差う所は 毫釐に在り

江風送子来

江風 子を送つて来り

新月迎子帰

新月 子を迎えて帰る

風月同自然

風月は 自然を同す

吟弄亦爰為

吟弄して 亦た爰か為さん

注 符生士亨—符士亨という学生。甘泉の弟子。

②南昌—江西省南昌県。

52

送^①方金兩生還^②三福山^③二詩

二子何翩翩

二子 何ぞ翩翩たる

負笈路四千

笈を負うて 路四千

奈何為勢拘

奈何ぞ 勢拘を為さん

閨月上帰路

閨月 帰路に上る

安得効縮地

安んぞ 縮地に効を得

相見頃刻至

相見る 頃刻に至らんや

万里即跬步

万里も 即ち跬歩なるも

相見如夢寐

相見ること 夢寐の如し

我有縮地方

我 縮地の方有り

見堯在羹牆

堯の 羹牆に在るを見る

念茲倏在茲

茲に念えば 倏として茲に

在り

何憂山水長

何ぞ 山水の長きを憂えん

人為天地心

人は天地の心^⑧なり

無上下古今

上下古今無し

一体能感應

一体 能く感應せば

何遠近高深

何ぞ 遠近高深あらん

注 ①方金—方時素と金濫浜。ともに湛甘泉の

弟子。②福山—安徽省婺源県の西南。③勢拘

—むりに引き止める。④閨月—一月を経る。

⑤縮地—仙術によつて土地を縮め近づける法。

⑥跬歩—半歩。⑦羹牆—あつものとかきね。

人を仰ぎ慕うこと。『後漢書』に「昔堯殂之

後、舜仰慕三年、坐則見堯於牆、食則覩堯

於羹。」(李固伝)とある。⑧人は天地の心—

『礼記』に「故人者天地之心也。五行之端

也。」(礼運)とある。

43

送^①符生士亨還^②三南昌^③三章

ア 十年別子面

十年 子の面に別れ

千里憶子心

千里 子の心を憶う

子心既已見

子の心 既已に見え

慰我一何深

我れを慰むる 一に何ぞ深

き

イ 出門多路岐

門を出づれば 路岐多し

行行慎所之

行行 之く所を慎めよ

古人千里謬

古人 千里の謬も

76

送^①広州^②式守^③ 吳白灣赴^④部^⑤ 有序

白灣子吳子、素講^⑥於甘泉^⑦。今式広

守三年。雅朴惠愛、口不^⑧道^⑨意、有^⑩

長者之風。甘泉子薦^⑪之不^⑫能。時則

利口推^⑬賢君、終不^⑭能^⑮趨。時如^⑯三

投_レ石、而送_レ部之事至矣。感而成_レ詩、
以壯_二其行_一。

上客多黄金 上客は 黄金多_く

下客無黄金 下客は 黄金無し

既已無黄金 既_す已に 黄金無ければ

膠漆亦未深 膠漆_⑤も亦た 未だ深からず

旧云乃刻子 旧云_もう 乃の刻子_⑥を

清者一二倫 清き者は 一二の倫

利口佩相印 利口は 相印_⑦を佩_おるも

長者亦沈淪 長者も亦た 沈淪_{ちんりん}す

位高金亦多 位高く 金も亦た多きは

昔疎今曷親 昔は疎なるも 今は曷_{なん}ぞ親

しき

濯纓見天日 濯_{ちやく}を濯_{ちやく}い 天日を見

無愧白湾浜 白湾_⑦浜に 愧_はずること無_か

れ

注 ①広州―広東省南海郡広州府。②武守―副
長官。③吳白湾―湛甘泉の弟子。④部―中央
行政官庁の六つの部分け。吏部・戸部・礼部・
兵部・刑部・工部の一部。⑤膠漆―にかわと
うるし。転じて親交の固いこと。⑥刻子―貧
乏の子。⑦白湾浜―白い砂浜の湾。白湾子に
かけた。

4題 山西の寇子惇は、賦質敦厚。忠信は
孔子のようであった。甘泉は広大の心を持た
せようとしたが、できなかった。そこで寇子
が南京の司法官になって行く際、別れの挨拶
が心情に表われ、胸を打ったのを忘れること
ができないで、三首を作って贈った。

アは二人を両鶯に譬え、「相見不_レ尽_レ情
相思難_レ嗣_レ声」といって、離別の辛さを詠み、
イは寇子を璞中の玉に譬え、雕琢すれば至宝
が真に至宝となるが、「敗甲与_二枯草_一」尚可_二
以吾疑_二と詠み、こうなる勿れと戒め、ウ
は形下形上一体となり、敬義を修めよといっ
ている。

21題 楊士徳が西樵から潮州に帰るのを送
った詩である。西樵（広東省南海県）は、甘
泉が五十三歳の年、病氣静養のため帰ってか
ら、五十七歳までの在野期と、七十五歳致仕
してから九十五歳で没する間住み、子弟を教
育した処である。このいずれの時期かは、定
かでないが、士徳が西樵を出、官山（広東省
南海県の西）を通じて行く際の、甘泉の気持
ちが如実に表現されている。ことに「短景倏

如_レ流 永懷_二歳將_レ暮_一」は感懷を催する。

42題 莊西峯が浦江（浙江省）へ帰るのを
送った詩。定山（浙江省杭県の東南）の出雲
を、甘泉はこよなく愛した。莊西峯はその定
山の見えるところへ帰って行く。私は定山の
ように西峯子を愛すると、「愛_レ子若_二定山_一」
聊以慰_二予意_一と詠んでいる。

43題 符生士亨が南昌へ帰るのを送った詩
で、三章から成っている。十年一緒に生活し
た符生が帰るのであるから、甘泉にとっては
断腸の思いであつたらう。アの「子心既已見
慰_レ我一何深」や、イの「出門多_二路岐_一」行
行慎_レ所_レ之、及びウの「風月同_二自然_一」吟
弄亦奚為」は、甘泉のその思いがよく表され
ている。殊にウの詩は素晴らしい。

52題 方時素と金濫浜の二人が、福山（安
徽省）へ帰るのを送った詩で、二人は四千里
もある遠いところから、笈を負うて游学に來
たのだから、無理に引き止めることはしない。
どんなに遠く離れても、「人為_二天地心_一」無_二
上下古今_一 一体能感_レ応 何遠近高深」と結
んでいる。

76題 広州武守の呉白湾が部へ赴くのを

送った詩である。白湾は元來甘泉に教えを受けた門人であるが、雅朴惠愛、思うことをいわず、長者の風があった。甘泉はその才を高く評価し、部勤めを薦めたが、利口者に押されて、意の如くならなかった。ところが水に石を投げるように、思いがけなく部勤めになった。それに感激して詩を作り、壮行とした。

君は子供のころは貧乏であった。何事も黄金の世の中であるが、黄金に左右されるようなことはしてくるなと、「濯^①櫻見^②三日^③」無^④愧^⑤白湾浜^⑥と詠み、いつまでも白湾に因んだ白湾浜であってほしいと願っている。以上六題の詩には、甘泉の惜別の情が遺憾なく吐露されていて、読者に深い感動を与える。

(4) 家庭

「家庭」を詠んだ詩は、六題六詩ある。ここにはこのすべてを挙げる。それは、甘泉のプライベートな側面を窺う好個の資料である

からである。

13 三婦辞

大婦厭糟糠^①
中婦足梗梁^②
小婦何綽約^③
装金調玉漿^④
愁榮各未終^⑤
大婦は^①糟糠^②を厭^③い
中婦は^④梗梁^⑤に足^⑥る
小婦は^⑦何ぞ^⑧綽約^⑨たる
金を装^⑩い玉漿^⑪を調^⑫う
愁榮^⑬各^⑭の^⑮未^⑯だ^⑰終^⑱ら^⑲ざ^⑳る^㉑に

微日落陰岡

微日^①陰岡^②に落^③つ

注

①大婦—適長子の妻。②糟糠—かすとぬか。粗末な食物。ここは「糟糠之妻」の意。つまり貧乏で糟糠などの粗食を共にし、苦難を共にした妻。『漢書』に「貧賤之交不可忘。……不^①下^②堂。」(宋弘伝)とある。③中婦—次男の妻。④梗梁—うるちの大あわ。ここはよく炊事をした意。⑤小婦—三男の妻。⑥綽約—しとやかで美しい。⑦玉漿—玉の汁。これを飲むと不老長生するという。転じて美味な飲料をいう。⑧微日—かすかな日ざし。⑨陰岡—日かげの岡。

31 治官舎後、小圃種^①蔬大吟

先哲家為山^①
予独愛担夷^②
後園積土丘^③
剗高平其低^④
我無治平術^⑤
傲井理疏畦^⑥
縱橫稱疏密^⑦
南北方東西^⑧
以茲如我心^⑨
周正無斜欹^⑩
抱甕有代功^⑪
先哲の家は山を為す
予独り担夷を愛す
後園は積土の丘なりしも
高きを剗り其の低きを平かにす
我治平の術無く
井に倣って疏畦を理む
縱横疏密を稱るに
西北は東西に方う
茲れを以て我が心の如く
周正して斜欹無し
甕を抱いて功に代う有る
桔槔遂忘機^⑫
老夫自退食^⑬
随意行杖藜^⑭
非徒見生意^⑮
亦且調變之^⑯
培灌自時若^⑰
雨暘不可期^⑱
懷彼灌園翁^⑲
亦た且に之れを調變す
培灌自ら時に若い
雨暘期す可からず
彼の灌園の翁を懷い

食力無忸怩^① 食力して 忸怩たること無

利沢苟公溥^② 利沢は 苟くも公溥たるも 何必拔園葵^③ 何ぞ必ずしも 園葵を抜か

豈有廢地力^④ 豈に 地力を廢すること有

而況暴殄為^⑤ 而るを況んや 暴殄を為さ

理蔬不愧高^⑥ 蔬を理むる 高きを愧じず

理蔬不愧卑^⑦ 蔬を理むる 卑きを愧じず

不熟知時饑^⑧ 時饑を熟知せず

拳箸思氓疲^⑨ 箸を挙げて 氓疲を思う

天下尚多山^⑩ 天下 尚お山多く

崎嶇不可犁^⑪ 崎嶇 犁く可からず

安得尽經理^⑫ 安んぞ 經理を尽すことを 得んも

井授 流離無し^⑬ 井授 流離無し 豈に止だ 流離無きのみな

らんや^⑭ 礼義 天葬を生ず^⑮ 礼義 天葬を生ず 四方 兵刑を措き^⑯ 四方 兵刑を措き

馨香格神祇^⑰ 馨香 神祇に格る

始知農圃事^⑱ 始めて 農圃の事を知る

是為大平基^⑲ 是れ 大平の基い為り

泉叟癸巳冬^⑳ 泉叟 癸巳冬

理蔬作此詩^㉑ 蔬を理め 此の詩を作る

注 ①井一井田の制。②周正一平かにする。③

斜欹一かたむく。④抱甕一かめを抱いて水を

汲み、田にそそぐ。⑤桔槔一はねつるべ。⑥

退食一官吏が家へ帰って休息する。⑦杖藜一

あかざのつえ。⑧調羹一ととのえやわらげる。

⑨雨暘一雨が降ると、日がかげると。⑩灌園

翁一明の藩時雍。錢唐の人。灌園生と号した。

性簡淡、郡城の東に隱居。詩に巧で奇語が多か

った。⑪食力一人民の租税によって生活する。

⑫公溥一明の錢如京の字、桐城の人。弘治の

進士、嘉靖中刑部尚書になる。⑬拔園葵一清

廉な官吏の喩、春秋魯の公儀休の故事。⑭地

力一土地の生産力。⑮暴殄一あらし絶やす。

⑯氓疲一民の疲れ。⑰崎嶇一けわしい山路。

⑱井授一井田を授ける。⑲天葬一常にかわら

ない道、天道。⑳神祇一天つ神と國つ神。

寓也。一在^①羅浮之朱明。一在^②西樵

之大科。一在^③天閼。一在^④甘泉。未^⑤

能^⑥大婦宇宙之本宅。且以^⑦四時、

分^⑧居四寓。春居^⑨羅浮、夏居^⑩西樵、

秋居^⑪天閼、冬居^⑫甘泉。作^⑬四居吟。

春宜居羅浮^⑭ 春は 宜しく羅浮に居るべ

冬宜居甘泉^⑮ 冬は 宜しく甘泉に居くべ

夏宜居西樵^⑯ 夏は 宜しく西樵に居るべ

秋宜居天閼^⑰ 秋は 宜しく天閼に居るべ

何以謂之宜^⑱ 何を以て 之れを宜しと謂

順氣無乖愆^⑲ 氣に順つて 乖愆無ければ

羅浮春花發^⑳ 羅浮は 春花發き

西樵夏木蕃^㉑ 西樵は 夏木蕃り

天閼秋水清^㉒ 天閼は 秋水清く

甘泉冬背寒^㉓ 甘泉は 冬背寒し

四時運無窮^㉔ 四時 運りて窮り無く

吾以了吾縁 吾以て吾が縁を了る

注 ①羅浮—羅浮山のこと。広東省増城県の東。

②朱明—羅浮山にある第七洞をいう。朱明は太陽の意で、ここは太陽がよく耀いているところから、この名がある。③西樵—一三七頁

注④参照。④天関—不詳。⑤甘泉—広東省甘泉郡。甘泉は郡内の増城に住んだので、暗に増城を指す。⑥乖愆—もどり誤る。

59

自寿、且酬三十子寿觴

生年八十一 生年 八十一

八十能知非 八十 能く非を知る

秋瓜蒂脱蒂 秋瓜は 未だ蒂を脱せず

多年亦奚為 多年 亦た奚をか為す

所幸男子身 幸する所 男子の身

聰明無捐虧 聰明にして 損虧無し

又幸生中国 又た幸に 中国に生まれ

四朝全盛時 四朝 全盛の時

収身自卿相 身を収め 自ら卿相

婦来学鵾夷 婦り来つて 鵾夷を学ぶ

朱明与朱陵 朱明と朱陵と

洞天随所之 洞天 之く所に随う

挈家入烟霞 家を挈げて 烟霞に入り

永謝世危機 永く 世の危機を謝す

又幸得其門 又た幸に 其の門を得

入室似有期 入室 期有るに似たり

自效超六合 效より 六合を超え

無論到期願 論無く 期願に到らん

試与諸賢約 試みに 諸賢と約し

且作廿年規 且く 廿年の規を作らん

注 ①三十子—三十歳の子。次子束之。②秋瓜—秋熟す瓜。③損虧—そんとかけると。④四

朝—憲宗・孝宗・武宗・世宗。⑤卿相—大臣。⑥鵾夷—馬の革で作った酒を入れるふくろ。

⑦朱陵—羅浮山にある名勝境か。⑧洞天—洞天福地の略。天下の名勝境、仙人のいる所をいう。『仙經』に「三十六洞天、七十二福地」とある。⑨烟霞—西樵山にある烟霞洞をいう。ここは西樵入りをしたこと。⑩六合—上下四方、転じて宇宙。⑪期願—百歳。『礼記』に「百年曰期願」(曲礼上)とある。

⑫六合一—「居簡而行簡、無乃—」(雍也)とある。⑬中—心。⑭儼—つつしみ。きちんとしていること。⑮貨—たから。金錢珠玉布帛の総称。⑯嫺—みやびやか。優雅。

⑰父老—父老。予の懶を笑うも

父老笑予懶 父老 予の懶を笑うも

三日一梳頭 三日 一梳頭

父老笑予懶 父老 予の懶を笑うも

父老笑予懶 父老 予の懶を笑うも

父老笑予懶 父老 予の懶を笑うも

父老笑予懶 父老 予の懶を笑うも

父老笑予懶 父老 予の懶を笑うも

父老笑予懶 父老 予の懶を笑うも

父老笑予懶 父老 予の懶を笑うも

父老笑予懶 父老 予の懶を笑うも

父老笑予懶 父老 予の懶を笑うも

父老笑予懶 父老 予の懶を笑うも

我年九十二 我年 九十二

為人祖高祖 人と為り 高祖を祖とす

正吉抱玄孫 ③ 正吉 玄孫を抱き

天光臨正午 天光 正午に臨む

性情不呱呱 性情 呱呱せず

面目已靖好 面目 已に靖好たり

我若躋舜年 我若し 舜の年に躋るも

見爾志於道 爾の 道に志すを見ん

立此從心根 此に立ち 心根に従い

生生不踰矩 生生 矩を踰えざれ

注 ① 丁巳―世宗の嘉靖三十六年（一五五七）。

② 高祖―五世の祖。祖父の祖父。元徳をいう。

③ 正吉―正月吉日。④ 呱呱―小児が泣くさま。

⑤ 靖好―やすらかで美しい。⑥ 舜の年―舜は

虞舜のことで、中国古代五帝の一。姓は姚、

名は重華。その先、虞に国し、有虞氏と号し

た。堯に挙げられ、一政を摂すること三十年、

禪讓によつて帝位に即き、四十八年在位し、

子の商均不肖なるにより、位を禹に譲つた。

舜の長命をいう。⑦ 心根―本當の心。⑧ 不踰

矩―正しい道をはずれない。『論語』に「七十而從心所欲、――」（為政）とある。

13 題 湛甘泉には三男三女がいた。長子を

東之、次子を東之、季子を涑子といい、長女

を適與、仲を適劉、季を適黎といった。この

詩は、三男のそれぞれの婦人について感じた

ことを詠んだもので、大婦は炊事が嫌いだが、

中婦はよくやり、小婦はしとやかで美しく、

美味の飲物を作ることを忘れない。この三婦

といつまでも愁樂を共にしたいが、老いてし

まった自分が悲しいと嘆いている。「愁樂各

未終 微日落陰岡」は、甘泉の心中をよ

く表わしている。

31 題 この詩は、甘泉が家へ帰って、小圃

に野菜を作る様子を詠んだものである。終り

に「泉叟癸巳冬」とあるから、世宗の嘉靖十

二年（一五三三）、甘泉六十八歳の冬のこと

である。この時、甘泉は南京礼部尚書であつた。

役所の仕事が終わってから、家へ帰り、小

さい畠に野菜作りをする。昔の官吏は「拔園

葵」といつて、野菜作りはしなかった。それ

は農天の生業を圧迫し、官吏の清廉を害する

からであつた。しかし甘泉はこれをした。す

ると、民の苦勞がわり、「不熟知時僅」 拳

箸思「氓疲」と詠み、「豈止無流離」 礼義

生「天彝」といい、この中に人倫の道の生ず

ることを知った。そして最後に、「始知農圃

事」是為「大平基」こと、農事の大事なこと

で結んでいる。

53 題 甘泉には四居があつた。それは羅

浮・西樵・天関・甘泉で、春は羅浮、夏は西

樵、秋は天関、冬は甘泉に寓居した。そして

次にその理由を述べた。

59 題 甘泉八十一歳の年、自ら長寿を寿ぎ、

また、三十歳になつて次子東之から、寿觴を

受けたことに酬いた詩である。甘泉の八十一

歳は、世宗の嘉靖二十五年丙午（一五四六）で

ある。東子は世宗の嘉靖三十年辛亥（一五五

一）に没しているから、三十五歳で早世した。

多年なすところはなかつたが、幸いに男子

の身で中国に生まれ、四朝の全盛に仕え、大

臣にまで昇進し、家へ帰つては酒を嗜んだ。

よく山水を愛し、一家を携えて西樵へ移つた

五十三歳以来は、多くの門弟を得て楽しい毎

日である。さて期頤まで生きよう。それには

あと二十年の余命を諸賢と約束する規定を作

ろうというのである。

因に甘泉は、世宗の嘉靖三十九年庚申（一五六〇）、九十五歳で没したから、期頤には五歳足りなかったが、当時としては長命で、天寿を全うしたといえる。

62題 髪を櫛けずることから、甘泉の人生観を詠んだ詩である。甘泉は三日に一遍しか髪を櫛けずらないので。村の長老たちは、その懶を笑うが、自分は鶏鳴に起きてするのだから太簡ではない。太簡は敬の反対で。心に儼すなわち敬があれば、懶を徳の助けとすることができ。天地は簡易であるから、自分はこれを離れることはできない。三日一遍の梳頭も、実は懶ではなくて簡易なのである。

96題 甘泉が九十二歳の正月十二日に、玄孫を抱いて、その性情容貌や甘泉の願いを詠んだ詩である。「性情不三呱呱」面目已靖好」の句や、「我若躋三舜年」見爾志於道」立レ此從三心根」生生不踰三距」などの句には、甘泉の玄孫を愛する気持ちだが、躍如として表われている。

結 論

湛甘泉の詩、四百十首の中、ここには、四言詩十首と、五言古詩二十一首を挙げた。五言古詩は、表にも示しているように百三十八首ある。これを詩の性格から分類し、「自然」二首、「友情」三題五首、「送別」六題八首、「家庭」六首を選んだ。それは主に、湛甘泉の人物を観るためである。

四言詩には「人物」を詠んだ詩の外に、「学説」や「思想」を詠んだ詩もあるが、総数十首なので、全部挙げた。五言古詩は詩数も多く、分類も多岐に亘っているので、「人物」だけに絞り、その中の「自然」「友情」「送別」だけを取り出し、解説した。

湛甘泉の詩は、「自然」そのものを詠んだのは、前述したように二首だけで、後は総て「人事」や「事物」についてである。これが湛甘泉の詩の特質である。ではどうして、そうなったのであろうか。思うに、師陳白沙（一四二八—一五〇〇）の影響と見ることができ。

陳白沙には著書がない。その理由は、一つは自分の考えを詩に寓したこと、他は自ら著

述は必要ないとしたことである。『白沙子集』に、「白沙先生は著作無し。著作の意を詩に寓す。是の故に、道徳の精は必ず詩に於て、之れを発す。天下後世之れを得、是れに因つて以て伝へ、是れを教へとす。」（八詩教解原序／湛若水）といい、また「曾て道の頭晦は、人に在りて言語に在らざるを以て、遂に意を著述に絶つ。」（同八白沙先生行狀／湛若水）といっている。

王陽明との「友情」を詠んだ詩、寇子惇・楊士徳・莊西華・符生士亨・方時素・金濫浜・呉白灣等への「送別」の詩を読むと、湛甘泉の心情溢れる人間性が、彷彿として眼前に浮んで来る。また私的生活を詠んだ「家庭」の詩からは、世間一般の人情に精通した夫子の感を抱く。これが大儒である所以であらう。以上湛甘泉の「詩」の中の、「人物」を中心に述べて来たが、それも主に「五言古詩」だけなので、十分いい尽くされているとは限らない。したがって今後は、他の詩形にも波及し、整序検覈して、体系あるものにまとめる考えである。

（本学助教授・中国文学）